

母親の育児態度に関する心理学的研究

詫 麻 武 俊（東京都立大学人文学部心理学研究室）

発達心理学の観点から人間を考えた場合、人間が他の生物一般に比べて豊かな可塑性をもっているという事実が指摘される。本能という生得的適応手段をごくわずかしか具備していない人間は、生後の経験に多くのことを依存している。言語を獲得すること、道徳を身につけること、秩序ある社会生活を営めるようになることなど、これらはすべて生れてから習得するものである。

発達過程においては成熟という要因も無視できない。心理学でいう成熟とは、外界から刺激や影響とは比較的無関係に、内部的要因によって自発的に出現する行動を意味している。発達初期には、たとえば這う、立つ、歩く、走るというように固定した序列性が認められるが、時間の経過に対応して、それぞれの特徴が一定の順序で出現するのはいずれも成熟の要因によるものである。以上のように発達過程の基礎に成熟を考えねばならないが、人間の場合には生後の経験を重ねることによって社会化される程度が大きいためである。よくいわれることであるが、人間は人間の手によって人間の社会の中で育てられないと人間らしくなれないのである。

ここでいう社会化というのは、ひとりの人が、自分がそこに生れ、そこに所属するようになる社会の、固有の生活様式、慣習、価値基準などを獲得していくことをいう。各家庭は広く社会と連関し、その社会の文化を継承しており、これらの特色は家庭を通して伝達される。社会化の第一歩は家庭の中で親を通して行なわれるのである。

親が子どもに伝えるものには大別して普遍的、一般的なものと、特殊的、個別的なものがある。身近かに例をとれば、われわれが日本人として日本語を話し、日本人らしい起居動作を身につけているのは前者の普遍的なものにあたり、他人に負けないように努力するとか、下品な言葉を使わないようにするとかいうことは生後の育てられかたに基く相違であって、これは後者の特殊的なものにあたる。もちろん、この分類は相対的なもので

あり、また厳密なものでもない。

子どもがどのように発達することを望むか、ということを経験期待という。親は現実のわが子に対してさまざまな期待をもつ、病気をせずに健康に育てたい、というような内容の期待はすべての親が一樣にもつ期待であろうが、心的発達については親によりかなりの差異が認められる。たとえば、友だちと仲よく遊ぶ子どもになって欲しいと期待する親もあれば、友だちとの競争に負けないで人生の勝利者になって欲しいという親もある。また誰からも愛される素直な子どもであって欲しいと望む親もあれば、正しいと思ったことはどこまでも主張できる子どもになって欲しいと望む親もいる。経験期待の内容は性別によっても出生順位によっても相違することは従来から指摘されてきた通りである。

経験期待の内容はすべて明確に意識されているとは限らない。むしろ意識されていないことも多いと考えられる。しかしその内容が何であるかは親の子どもに対する態度の中にあられる。外から泣いて帰ったときにどう言うか、どんな本を読んでやり、どんな話をしてやっているかなどの、日常の何げないしつけの中に認められるのである。

幼ない子どもにとって家庭は唯一の生活環境であり、親はもっとも接触の多いおとなである。柔軟な可塑性をもつ子どもの心に全体的な家庭の雰囲気、親の生きている姿は大きな影響力をもっているのである。

本研究は母親の育児態度に関するものであるが、内容的には経験期待と子どものパーソナリティに関する問題である。すなわち、どんな内容の期待をもつ母親に育てられると、どんな子どもになりやすいか、ということである。

研究を進めるために母親の経験期待にどのような個人差があり、これはどのように測定されるか、という問題がある。質問紙調査は従来も用いられ本研究でも使用するが、これには短所も限界もあるため、例数は少なくとも詳細な面接調査も必要で

ある。

広義における母親の育児態度には時代による差もあれば地域差、階層差もある。時代差については文献的研究、回想に基く資料の収集などの方法がある。地域差、階層差については研究条件にあった対象集団があって、その協力が得られることが必要である。子どものパーソナリティについては質問紙法は年齢的に困難なので、子どもを知っている人の観察、評定による方法、あるいは対象者に直接実施することの可能な投影法やそれに類似した方法を用いなくてはならない。

次に述べるのは今後の研究の出発点となる育児態度の世代差に関する研究で、これを主に担当したのは東京都立大学の日向雅美である。この研究の要旨は次の通りである。

調査対象は古い歴史をもつ某国立女子高等教育機関の卒業生である。卒業した時期によりA、B、Cの3世代にわけた。世代によって育児態度、母親としての意識にどのような差が認められるかを明らかにしようとするのが主たる研究目的である。

表1は調査対象に関する基礎的事項である。郵送法による調査結果の回収率は47.0%であった。卒業の時点ではどの世代もほとんどが就職しているが、育児期間中も仕事をしていたものはC世代に著しく少ない。

表2は出産に関する事項である。結婚年齢や最終出産年齢についてA世代とC世代に差が認められる。

表3は具体的な育児行動である。母親の仕事の有無、育児を手伝ってくれる人の有無についてはA・B世代とC世代の差が大きい。授乳様式、育児書の利用頻度についても世代間の差が認められる。教育方針についてA世代とC世代を比較すると、夫の育児への協力度、関与度がC世代の方に著しくなっている。

表4は育児をどう考えるかということを示している。育児は精神的にも肉体的にも疲れると述べたものが、どの世代にもほぼ同じくらいの比率でいる。これに対して育児は有意義なことであり、

これをするのは女性の義務であって自分の成長にもプラスになったと考えているものはA・B両世代に多く、C世代に少ない。これに対して自分の生き甲斐は育児とは別のところにあると述べているのはC世代に多い。

表5は育児期間中の母親の心理である。A・B両世代はすでに手のかかる育児期間を終えた女性が回顧したものであり、C世代は現に育児中である。このような違いを考慮に入れなくてはならないが、全般にC世代よりもA・B両世代のほうが穏やかに安定した気持で育児をしていたように思われる。育児ノイローゼに共感できると回答したものがC世代ではA世代よりもきわめて多い。

以上は調査対象数も多いとはいえず、また高度の教育を受けた女性たちばかりであって、決してわが国の女性を代表するものではない。しかし育児の仕方についても育児中の母親の心理、育児観そのものにしても戦争をはさんだ30年あまりのあいだに著しく変化したことを察することができる。

子どもを育てるということは遠い昔から代々続けられてきたことであるが、その時代のものの考え方、とくに親と子どもはどうあったらよいか、女性は何をすべきなのかという大きな問題が反映していると考えられる。

ここに述べた研究は、わが国の母親の世代差を問題としたものであるが、現時点において子どもに対する発達期待には大きな個人差があると考えられる。日本とアメリカの比較もなされているが、外国の育児観や育児方法とわが国のそれとの比較も重要である。

母親が子どもに何を期待し、どう育てるかは子どもの将来に深いかかわりをもっている。非行、登校拒否、家庭内暴力なども親の育児態度と無関係ではない。明年度以降は親の子どもに対する発達期待に関連する問題を続けて研究する予定である。

〈表1〉調査対象数および調査対象に関する
基礎的事項

		A世代	B世代	C世代
第1次 郵送法 調査	回収数	55	36	50
	有効数	50	35	49
第2次面接調査		10	1	8
調査時点での 平均年齢		67.2歳	54.6歳	31.5歳
卒業年次		昭和3年 ～8年	昭和15年 ～20年	昭和40年 ～45年
出身 科系	文科系	15	4	23
	家政系	25	23	13
	理科系	10	8	13
卒業時点で 就職した人		49(98.0)	34(97.1)	46(93.9)
育児期間中も 仕事をしている 人		31(62.0)	20(57.1)	12(24.5)

〈表2〉 出産に関する基礎的事項

	A世代	B世代	C世代
1 平均結婚年齢	26.9歳	26.1歳	24.7歳
2 平均初産年齢	27.7歳	28.2歳	26.4歳
3 最終出産の平均年齢	35.7歳	31.6歳	(29.5歳)
4 平均出生児数 ()内は現在 の健在児数	3.4人 (3.2人)	2.2人 (2.0人)	2.0人 (2.0人)
5 中絶経験者の比率	18.0%	42.9%	16.3%

(注)．C世代の最終出産の平均年齢は、子供が2人以上いる人について計算した。

〈表3〉 具体的な育児行動

		A世代	B世代	C世代
1 母生活条件	育児期間中は、母親として育児に専念	38.0	43.9	75.5
	育児期間中も、勤めている	62.0	57.1	24.5
2	母親の自分の他に子供の世話をしてくれる人がいる	84.0	74.3	40.8
3 授乳様式	母乳のみ	42.0	45.7	36.7
	混合乳 (母乳と人工乳の両方)	40.0	34.3	8.2
	時間決めて与える	86.0	71.4	51.0
	泣くと与える	10.0	17.1	38.8
4	育児の情報源は育児書である	40.0	28.8	63.3
5 教育方針	教育方針を決めるのは、母親の自分である	42.0	45.7	24.5
	教育方針を決めるには、夫と相談する	38.0	34.3	55.1
6 父親力の度 育児への	夫は子供に関心があり子ほんのうである	56.0	60.0	75.5
	夫に育児への協力を求めた	40.0	34.3	85.7
	夫は細かい子供の世話も手伝う	22.0	37.1	51.0

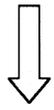
〈表4〉 育児労働への評価

		A世代	B世代	C世代
1.	育児は楽しい	44.0	37.1	42.9
	育児は精神的に疲れる	40.0	42.9	38.8
	育児は肉体的に疲れる	62.0	65.7	63.3
2.	育児は有意義なすばらしい仕事である	74.0	60.0	40.8
3.	育児は女性の義務である	56.0	51.4	18.4
4.	自分にとって育児は生きがいであり、自分の成長にもプラスになった	78.0	65.7	34.7
5.	自分の生きがいは育児とは別である	20.0	14.3	61.2

(注)．表中の数字は、各世代の有効データ中、各項目内容を肯定した人のパーセンテージである。

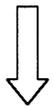
〈表5〉 育児期間中の母親の心理

	A 世代	B 世代	C 世代
1. 何となくいらいらする	34.7	57.1	83.7
2. 子供を育てることが負担に感じる	22.9	25.7	32.6
3. 自分のやりたいことができなくてあせる	24.0	40.0	69.4
4. 自分が世の中に遅れてしまうという感じがする	16.0	37.1	44.9
5. 自分の関心が子供にばかり向いて視野が狭くなるように感じる	18.0	37.1	49.0
6. 自分の若さや女性としての美しさが失なわれてしまうように感じる	2.3	2.9	0.0
7. 自分は母親として不適合と感じる	30.0	34.3	44.9
8. 子供を産まない方が子供のためにも自分のためにもよからと思う	9.3	5.7	0.0
9. 育児ノイローゼに共感できる	4.0	11.4	59.2



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



発達心理学の観点から人間を考えた場合、人間が他の生物一般に比べて豊かな可塑性をもっているという事実が指摘される。本能という生得的適応手段をごくわずかししか具備していない人間は、生後の経験に多くのことを依存している。言語を獲得すること、道徳を身につけること、秩序ある社会生活を営めるようになることなど、これらはすべて生れてから習得するものである。